

てんかん性

弘前大学医学部 神経精神医学教室
和田 一丸

●はじめに

抗てんかん薬治療の進歩により、発作抑制の得られるてんかん患者が多くなりました。一方では、てんかんに対する社会的偏見が是正されつつあり、患者自身の病気に対する認識も大きく変化してきています。このような状況下、多くの患者が結婚し、子どもをもつことを望むようになりました。しかし、妊娠に際して、胎児に対する抗てんかん薬の影響、奇形発現、妊娠中の発作の悪化、てんかんの遺伝性などの不安を抱く患者は少なくありません。そこで、本連載では、てんかんと性の

問題について、てんかん患者の結婚・妊娠・出産・育児に関する問題を中心に解説していきます。

一、てんかん患者の結婚

(1) てんかん発作が患者の結婚に与える影響

てんかん発作が患者の結婚に与える影響については、発病年齢が早いほど結婚率が低下するという報告が多くみられます。一方、結婚時に発作が抑制されていた者は少なく、多くの患者は発作が抑制されていない状態で結婚していたとの報告があります。私たちは、一九九六年に、弘前大学医学部附属病院神経精神科外来に五年以上通院を継続している成人てんかん患者を対象に、てんかん患者の結婚に関する調査をおこないました。その結果、結婚時点からさかのぼって過去三年間に発作が抑制されていたものの割合は、男性が三〇%（六十三例中十九例）、女性が二一%（七十一例中十五例）でした。この結果は、てんかん発作が抑制されていない状態で結婚している例が多いことを示しており、てんかん患者にとつ

て発作自体は結婚に対して著しい阻害要因とはならないと考えられました。

結婚に対する阻害要因としては、発作よりもむしろ知能障害、性格変化、精神病状態、神経学的障害などの合併障害が重要となる場合が多いようです。

また、疾患の存在に対する不安や劣等感、てんかんの遺伝性への危惧といった患者の内面的抑制も結婚阻害要因となります。女性患者の結婚率が男性のそれより高いとする報告が多いのですが、これは男性患者の場合には、定職をもつことが結婚の前提となることが一因と考えられます。日常診療に携わっていますと、結婚についての相談を受けることがしばしばありますが、その際には、相手に病気のことを話した方がよいと助言しています。その際、単に病名を伝えるだけでなく、症状やこれまでの治療経過について、相手にも病院に一緒に来てもらい主治医から説明してもらうことがよいでしょう。そうすることにより、自分自身も病気に関して再認識することができ、お互いの理解も深まるだろうと考えます。